トップランナー
今、この人たちが熱い
vol.2

有限会社降矢（ふるや）農園
（福島県）

「面白いから、続けていく」地域を支える不屈の精神

「人生は短いんだから、なんでもやってみないと。それだけですよ」
そう笑うのは、福島県郡山市で有限会社降矢農園を経営する降矢敏朗（としお）さん、セツ子さんご夫妻。
土地依存型の農業からハウス栽培への転換を皮切りに、常に二人三脚で新しいことにトライし続けるお二人の、バイタリティの秘密を探ります。

文／川口有紀（フリート）　写真／阿部栄一郎（フリート）

土地依存型の農業からハウス栽培へ転換

阿武隈山系の山間部にある有限会社降矢（ふるや）農園。かつては葉タバコの栽培や稲作、養蚕・酪農からなる複合経営を行っていました。大きな転換期は1980年、経営者の降矢敏朗さんがドイツやデンマーク、スイスなどハウス栽培の先進国に農業視察に行ったこと。「農家でも週に1日はきちんと休み、教会へ通う。その生活スタイルは衝撃でした。これまで私がやってきた土地依存型の農業では、天候に左右されるし、経営が不安定で、そんなことはできない。これからはハウス栽培の時代だ、と思いました」（敏朗さん）。

そうして82年にかいわれ大根のハウス栽培に挑みますが、当時は栽培技術が確立されておらず、失敗して借金を抱えてしまいます。しかし敏朗さんを奮起させたのは「家計は私が自分で稼ぐから」という、どんな状況でも明るく笑い、背中を押してくれる妻・セツ子さんの言葉でした。他の生産農家からノウハウを学び、試行錯誤を重ね、83年の春には、逆境を乗り越え約1億円の売上を達成。その年に法人化を果たしました。

ところが、96年にO-157騒動が発生。売上が約9割も落ち込む大打撃を受けましたが、サンチュ、豆苗などのハウス栽培の数量を増やすことで、また立て直しました。前を向き続ける敏朗さんが「さらに新しいことを」と始めたのが、耕作放棄地を利用した放牧養豚です。それは地元集落のためでもありました。

「気付けば周りは荒れ地ばかり。なんとかできないかと思っていた時、沖縄で見た放牧養豚がヒントになりました」（敏朗さん）。草や木の根を掘り返して食べる豚を放牧することで、里山を守ることもできます。また、豆苗の根の部分も捨てずに飼料に活用しました。2009年にスタートして、今では「里の放牧豚」と銘打った加工品を自社で販売し、6次産業化の確立を目指しています。

生まれ育った地域を支えるさまざまな試み

セツ子さん自身も挑戦者です。行動派の敏朗さんを支えながら、繁忙期に臨時の保育所を設置するよう行政に働きかけるなど、地元の女性農業従事者のために活動を続けてきました。現在は農業法人の女性経営者による「やまと凛々アグリネット」の顧問として、農業における女性の地位の向上も目指しています。

これまで多くの苦難に見舞われてきた降矢農園ですが「何もやらなかったら食えなくなるだけ。だったらやってみよう」との思いで挑戦を続けてきました。現在のお二人の原動力になっているのが、〝地域の再生〟。東日本大震災では、このエリアの農業も打撃を受けました。離農者も増える中、夫婦で奮闘しています。「仕事や収入を得るのが難しい場所ですから、農園を続けることで地域の雇用を守りたいんです」とのセツ子さんの言葉通り、降矢農園には17人のスタッフが常勤。みんなで長く地域の農業を支えようとしています。

12年からは、今後の市場発展が見込まれる夏いちごの栽培も始めました。現在は郡山市に建設予定のワイナリーで使用する、ぶどう栽培の準備の真っ最中。いずれは地ワインが生ハム・ソーセージなどとともに郡山の名物になったら、と夫婦の夢は膨らみます。

「東京にただ製品を出荷するのではなく、ブランド化してたくさんの人にこの地を訪れてもらう。それがこれからの目標です」（敏朗さん）。「やるなら面白くないと」。そう語る夫婦の目は、地域の再生を見据えています。

夏いちごの市場での評価を高めるため、大きさだけでなく、味の向上も目標

降矢農園のあゆみ

1980年	ヨーロッパでの農業視察を経験する
1982年	水耕栽培の試験研究を始める
1983年	有限会社降矢農園設立。大型ハウス10aでかいわれ大根を生産
1991年	サンチュ、豆苗生産開始
1996年	O-157騒動でかいわれ大根85%減産
1997年	ひまわり（スプラウト）生産開始
2009年	放牧養豚開始、サンチュ増産
2011年	東日本大震災発生。受注のみの減産体制へ
2012年	夏いちご生産開始

降矢農園

所在地	▶福島県郡山市
ハウス面積	▶75.2a　敷地面積 ▶1.2ha
栽培品種	▶スプラウト（ブロッコリー、マスタード、レッドキャベツ、クレス）、サンチュ、豆苗、かいわれ大根、夏いちご
販売金額	▶1億1,000万円
労働力	▶17名（作業員13名、社長、取締役、事務1名、営業1名）

降矢農園の 特徴的な取り組み

1 ハウス栽培　ハウス栽培では、データを基にした科学的な視点も大切。天候に左右されることなく、安定的な生産が可能に

2 循環型農業　豆苗は可食部のみをカットしたものを出荷。残りの部分は破棄するのではなく、豚の飼料に利用

3 6次産業化の確立　自社で生産・加工・販売する「里の放牧豚」。いずれはこれらに合う地ワインの商品化も視野に入れている

4 放牧養豚　ハウス近くの耕作放棄地を利用した放牧養豚。20頭いる三元豚は地元のホテルなどに出荷している

5 地域での雇用　社員として働くのは近隣地域在住者が中心。生活を安定させ、地域の雇用を守る意図も

6 安心・安全のために　かいわれなどのスプラウト類は、微生物検査を毎日実施。放射能測定検査も自社で行い、HPで数値を公開